

此の如く敦煌の佛洞の創始については、從來の苻堅の建元二年の時とする説の外に、新に東晋の永和九年、北方はまだ分裂の情態に在つた當時に、既に此の事であつたことを示す史料が現はれて來た。思ふに樂傳が之を創始したといふ説は、武周の聖曆元年に李氏が新に佛洞を造營した時には、樂傳の立てた碑もあつて、それに樂傳の創始したことを書いてあつたか、若しくはその碑が時代上最も古き依據となるべきものであつたので、之を樂傳の創始に歸したか、或は別に史料の存するものがあつたかの何れかであらうし、永和八年—實は九年—の説は、五代の漢の乾祐二年、敦煌地方の地志を書いた際に、必ず何か此の説の據となるべき材料が存したものに違いない。今その材料として用ゐられた記事の部が運悪く殘缺して、之を認むることの出來ぬのは遺憾至極である。併しながらく兩説を生ずるに至つたとはいふものゝ、之を時代の上から考へれば、兩者の相違は僅に十三年であつて、此間支那全體の政治的形勢の上に於ては、甚だ注意すべき大變動を生じては居るが單に敦煌の千佛洞だけについて考へればこればかりの時代の前後は殆んど論ずるに足りない。たゞその創始が苻秦の建元二年に在るといふのが、必ずしも唯一の據るべき説ではないといふことを知つて置けば足りるのである。

かくて羅什が龜茲國より支那に伴はれた時より二三十年前、支那の僧侶にして初めて西方求法の途に就いた法顯三藏が、一月餘日も敦煌に滞在して居つた時よりも四五十年の以前、また有名な山西雲岡の石窟寺が、北魏時代の佛教流行によつて作られた時よりも百數十年の以前に於て、この千佛洞は創始せられたものであるが、かゝる洞窟を山腹に穿つて、中に佛像を祀り、周圍に佛畫を描くといふことは、假令それが龜茲や焉耆地方のものと、形式上多少相違を有して居るにしても、矢張り印度や西域諸國の系統を引いたものと見るべきで、黄土の壁立せる間に洞